

有吉佐和子

母子変容

下

母子変容
下

有吉佐和子

講談社

母子変容 下

昭和四十九年三月二十八日 第一刷発行

著 者 有吉佐和子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一一二
電話 東京(〇三) 九四五―一一一(大代表)／振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとり替えいたします。
© 有吉佐和子 一九七四

母子変容

下

葵輝代子^{あおいきよこ}にとって、時計の針が狂ったような日々が飛ぶように過ぎていた。睡眠時間がいつも足りなかった。撮影の合間には雑誌のインタビューがあり、高名なデザイナーのモデルとなって洋服を着て写真をとる仕事が入り、会社の宣伝部はマスメディアのあらゆるところに葵輝代子の顔を出す気で売りに売っている。

同時に二本の映画が葵輝代子の主演作品として撮影されていた。一つが終らないうちに次の製作が始まるので、輝代子は着せ替え人形のように、その都度ドレスを着たり、着物姿になったりした。

四本目の映画は再び松永英生^{まつながひでお}のオリジナル・シナリオで、幸せなことに現代ものだったが、凝りやの松永の注文を他のプロデューサーたちが寄ってたかって邪魔だてしてくる。

「松永さん、髪を切れといったって無理ですよ。髪の手は伸びるといっても、今のところまで長くするには何年もかかるんですからね。髪^{かみ}を使って下さい。次の作品は髪が長いのが女主人公の条件になってますし、今の作品もずっと長い毛でやってきて、途中で短かくするわけにはいきません」

松永は愛用のパイプを遂に叩きつけて喧嘩になった。

「葵輝代子は僕がスタアにした女優だ。僕が髪を切れといっているのに何故切れない」

「お言葉ですが松永先生、もう葵輝代子は先生のものじゃないですよ」

「誰のものだって言うんだ」

「会社の大事なスタッフさんです。竹谷会長の命令でもない限り髪は切れません」

「よし、そんな僕から会長に言う」

子供みたいな争いごとを竹谷大次郎は会長室で椅子を揺らせながら聴いていて、

「髪か。そやなあ、僕は長い方が好きやなあ」

と言ったものだから松永英生はあやうく憤死するところだった。

お留さんがその話を聞いて、

「そりやそうだよ、女の髪の毛を一々切ったり長くしたり監督の勝手にされた日には、女優は幾つ頭を持っても足りやしない。松永先生もどうして私に相談しないんだろう。櫛の先で短かく見せるぐらいの工夫はできるのに」

と言ったが、輝代子は結髪室では目を閉じて、その間でも眠ることにしていた。輝代子自身は髪の毛の長さなど、もうどうでもいいことだった。ただ眠くて、シャムプーの間に深く眠り、結髪にかかっても幾度も首が折れるように頭を前にコクンと落した。

シナリオはもらっていたが、役造りを工夫する閑などはなかった。ただ天稟の才が、結髪を終え、衣裳を着ると、自然と輝代子を役柄に誘いこんでしまう。あとは監督の言いなりになっていれればいい。

しかし松永英生の眼はきびしかった。

カメラのフラインダーから覗いてみて、ぴしりと言った。

「輝代子ちゃん、眠ったね」

「ええ」

「また腫れている」

それから助監督が輝代子の臉を冷やすために氷と氷嚢ひやうのうを買いに走り、撮影現場は輝代子の臉の腫れがとれるまで総ての活動を止めてしまった。松永英生は不機嫌にむっとり押し黙ってスタジオの隅に腰かけている。相手役は松永の手前、輝代子に話しかけることもできない。

臉の腫れがひくまで、輝代子は針の筵むしろに坐っているわけだった。どんなに眠くても女優は仕事を離れるまで眠ってはいけないのだと輝代子は骨身にしみて悟った。辛くて涙が出そうだったが、泣けばまた臉が腫れてしまう。女優という職業の苛酷さを輝代子は思い知った。

映画のプロデューサーは彼らなりに頭をかかえていた。葵輝代子の人気は沸騰していて、第二作の評判も上々だというのに、第四作の松永英生の分は遅々として進まないのだ。凝りやで時間をとるのには定評があったけれど、輝代子の臉が腫れてるなら急遽別きゆうきょくの場面の撮影にきり替えて、他の役者で仕事を進めていけばいいではないか。事実、他の監督たちは輝代子の寝起きの顔はカメラでとれないと気付くと、輝代子の後姿をとる場面とか、指の動きをとらえるとか、ちゃんと時間に無駄のないやり方いまだしじょうほうをしているのだ。

攻撃の的は松永英生でなく、今西治郎いまにしじろうに絞られていた。

「君、凝るといったって限度があるよ。あれではまるで葵輝代子を苛めるために毎日撮影所へやってくるようなものだ。第三作とかけ持ちになることは最初から承知で引受けたのだろう？ それが自分の氣に入るような呼吸が出来ないからといって、ライトマンから道具方から一日中ボカ

ンとさせておくのは会社にとっても大きなロスだとは思わないのか？　もう一つの作品だってワリを喰って撮影はちっとも予定通りに進まない。いったい君はどう思ってるんだ？」

会議室で机を叩いて詰めよられると、今西治郎自身が近頃の松永英生のやり口を持て余しているのだから、弁解よりも愚痴めいたことを言ってしまう。

「実際、僕も困りぬいているんですよ。輝代子ちゃんは家に帰ってもあの調子でやられていて、撮影所で出来なかった分は帰って夜の夜中でも稽古させているらしいんです」

「だから睡眠不足になるんだ」

「そこで瞼も腫れるんです。このままでは葵輝代子の健康が持たないんじゃないかと僕は心配してるくらいです」

「まあ若いから寝が足りなくても肌の荒れる心配はないだろうが、今西君、あの方は大丈夫なのかね。会長が虫をつけるなど言ったのを君は忘れていないだろう」

「それは絶対大丈夫です。松永さんもそれを一番警戒して目を放さないんですから」

「その松永さんのことだよ、僕が訊いているのは。あの様子は唯ごとならないよ。葵輝代子は無事かねえ」

「無事です、太鼓判を押します。松永さんは随分前から糖尿ですから」

「糖尿ほど当てにならない話はないよ」

露骨なことまで論議されて、ともかく仕事のためにも葵輝代子のためにも、松永英生の家に住まわせることはよくないという結論が出た。

「しかし、まさか一人でアパート住いをさせるわけにはいかないだろう」

「会長が虫はつけるなど言っていたんだからね」

「しかし母親だし大女優だからね、森江耀子は。当然それくらいことは言うよ」

「葵輝代子が母親と同じように、映画よりも演劇を選ぶと言い出していいんですか。僕は森江耀子に何度も会っているから確信を持って言えますが、彼女は映画というものは新劇と比較にならない下等なものだと思っているし、また公然とそう言っています」

「新劇の役者は誰でもそう言ってるよ。映画やテレビでよく稼ぐのは劇団では軽蔑されて小さくなっている。妙な世界だ」

「僕は葵輝代子を発見し、スタアダムに乗せた人間として言いますが、輝代子ちゃんをむざむざと花の会に取りられたくありません」

会議室は静まり返った。みんな葵輝代子が森江耀子の娘であることの重大さによりやく気がついたのだった。

「なるほどねえ、親子といっても複雑な関係なんだねえ」

「彼女の代表作は娘であつても演^やらせたくないんですから」

「それで試写会も来なかつたのか」

今西治郎は答えなかつた。彼の沈黙は人々に彼らの誤解を深めさせる効果があつた。

「話を元に戻そう。ともかく今のままでは營業的に言つて手が詰るのは目に見えているのだから、松永さんにどうやって撮影時間を短縮してもらうか、これは今西君に責任を持ってもらうしかないだろう」

「昭和初年じゃないのだし、黄金時代も終つてゐるのだから、一つの場合を撮るのに三日も四日もかかるようなことをされたんじゃないよ」

「それはそれとして、もっと具体的な提案はないかね」

「あります」

若いプロデューサーが待っていたように手を上げて言った。

「次の作品をスタートさせればいいんです。そうすれば第四作と第五作の順序が入れかわるだけで、映画館で葵輝代子の空くときはなくなるでしょう」

「三本かけ持ちになるぜ、それでは」

「いいじゃないですか。テレビじゃザラにいますよ、神風タレントと言って。同じ会社の同じ撮影所でのかけ持ちなんて、あの若さならどうってことはないでしょう」

「そうだねえ、松永さんのスローテンポでは所詮^{しよせん}予定の封切日には間に合わないのだから、他に方法がないよ」

新しい提案は待っていたように忽ち可決されていた。

葵輝代子の生活は、もうその前から時計の針が狂ったようになっていた。一つのスタジオ撮影が終り次のセットが組まれる間に輝代子は隣の建物の中で着替える。お留さんの指揮下でメイクアップも変えられる。映画と映画の間に、スチールの撮影が入る。もう輝代子の躰を本社に運ぶより、相手役も衣裳も撮影所の方へ持ってくるようになっていた。地球上の総てが、葵輝代子を中心にして廻っている。

そして、ある日。撮影所の一隅に用意されたスチールのスタジオで、

「やあ」

三上^{みかみきよし}潔の、ちょっとはにかんだ笑顔に出会ってから、輝代子の時計の針は完全に飛んでしまったようである。

潔もメイクアップをすませていて、臉にシャドウを入れていたから、前に会ったときよりもっ

と陰影の深い魅力的な顔立ちになっていた。それを真正面からまじまじと見て、輝代子はめまぐるしい毎日をとにかく今日まで生きてきたのは、三上潔と共演する予定を聞いていたからだと悟っていた。

第五作に予定されていたのは純愛もので『生きのびて』という題名がきまっていた。明らかに山崎慎二郎の『生まれきて』を意識して付けられたもので内容もどこか似ているが、作者は中堅のシナリオライターで彼のオリジナルということになっている。しかし筋立ても何もかも会議室でプロデューサーたちが口々に智恵を出しあったものを土台にして、中堅作家がまとめたものだ。松永作品と同じようにドラマティックなものがないので、監督も画面にリリシズムをほしがり、輝代子が他の作品にかかっている間に日本中の美しい山野を血眼になって探しまわった。これまでのどの作品より野外ロケーションの多い映画になりそうで、製作プロデューサーは輝代子を完全に一週間は拘束できるように他の二人のプロデューサーとかけあわなければならなかった。

「そんなスケジュールを組んで、もしその一週間で雨になったらどうするんだ？」

今西治郎が唇を曲げて訊くと、

「そのときは雨の場面にして撮ります。ともかくセットでは無理なのです」

若いプロデューサーが頑張る。

会議室で誰もが予想したように今西治郎がどう説いても松永英生は一向に自分の仕事のテムポをあげようとしなかったし、逆に自分の作品と同時に他に二本もの映画が輝代子を主演女優として進行していることに腹を立て、その腹立ちまぎれに一層厳しい演出家になって輝代子に途方もない注文をつける。

伊豆半島の小さな漁村にロケに出かけてきたとき、

「よく眠れた？　昨夜は遅かったらしいね。マージャンして待ってたんだけど、助監督が夜更しすると眼に疲れが出るからって無理やり寝かされちゃったんだ」

「撮り直しがあつて、……私がNGばかり出すものだから松永先生は怒るし、私も情けなくって、女優ってこんなに辛い仕事だとは思わなかったわ」

「今はまた特殊な情況だから、輝代子ちゃんも大変だよ、ねえ。三本も掛け持ちで主演だなんて正気の沙汰じゃないよ、はたから見ても」

「やっぱり、そう？　ここへ来るまで車の中で眠りっぱなしで、着いてすぐお布団へ倒れこんで眠っちゃったの。これからここに一週間いられるって今朝聞いたんだけど、本当かしら」

「本当だけど、輝代子ちゃん」

「え？」

「君、泳げるの？」

「ええ、どうして？」

「泳ぐ場面がとて多いんだよ。だから気になってたんだ」

「田舎の川で覚えたんです。海で泳いだことはないんだけど」

「真水で泳いでいたのなら海は楽だよ」

「本当？」

「ああ、塩分があるからね、体がその分軽くなって浮くんだ」

「本当？」

「ああ安心した」

「どうして？」

「知らないんだったら、僕が一から教えなきゃならないと思って心配していたんだ。うん、本当だよ」

潔が、輝代子の口癖を封じて肯いてみせ、二人は楽しそうに声を揃えて笑い出した。

輝代子も潔もそれぞれ特長のある美しい齒並びを相手に見せびらかしながら、いつまでも喉の奥で笑い続け、東京から遠く離れたこの海辺の僻村で、これから雄大な空と海に囲まれて一週間すごせるのかと思うと、倅で胸の奥が痛くなりそうだった。

「夢みたい」

「何が？」

「ここにいると女優だってこと忘れてしまいそうだわ」

「本当だねえ」

しかし撮影が始ると間もなく、輝代子にとって思ってもいなかった難題が待ちかまえていた。忙しすぎてろくに脚本も読んでいなかった輝代子は、彼女の役柄が海女であり、だから海水着など着ずに半裸になって泳いだり、潔と抱きあったりする場面があるのに気がつくと言くなった。

「嫌やです、私、絶対に嫌やです」

「そんなことを、本番前に急に言い出しても困りますよ、葵さん。脚本は二週間も前に今西さんに渡しといたんですよ」

「松永先生を呼んで下さい。松永先生だったらこういう映画に私を出そうとは思わない筈です。電話をかけさせて下さい」

「葵さん、そんなこと一番いけないよ。こっちの監督は松永さんの齢には及ばないけど俊才だし、既に若い世代の旗手なんだから、そんなこと言うのと逆上するよ」

「だって私、裸になるのは絶対に嫌やです」

「裸じゃないよ。全裸シーンなんか一つもない」

「とにかく嫌やです。東京へ帰らせて下さい」

思いの他、強硬なので、手を灼いた彼らは口々に早くも輝代子がスタア意識を持ち始め、我儘を言い出したと陰口をきいた。

「僕が説得してみましようか。葵さんには、この作品の値打ちがよく分っていないんじゃないですか」

聞いていられなくなって三上潔がプロデューサーに名乗りをあげた。

「うん、頼むよ。ここで監督を怒らせたらコトだからね」

「本当ですよ。僕だっていい映画に出られると思って出てきたんですからね、真剣なんです」

その調子、その調子と肯いて、プロデューサーは十中八九、輝代子は三上潔の説得にはなく、三上潔そのものに陥落してしまうだろうと思った。この仕事を続けている者にとって、美男美女が出会えば恋が生れるという現場はもう嫌やというほど見ているのだ。竹谷会長命令として「虫は、つけなや」という言葉は伝わっていたが、それも時と場合による。僻地のロケ先で若い俳優たちが恋の花を咲かせるのは、この世界では喫茶店に入ればコーヒーが飲めるのと同じように常識だった。

鄙びた宿屋の二階で、泣き濡れている輝代子に、三上潔は優しい兄のような口調で語り続けた。

「さわやかな映画にしたいって監督も言ってるし、この脚本のどこにもきたならしい情景は出てこないよ。輝代子ちゃんが裸になる場面なんて一つもないのに、そんなことを言って、みんなを

困らせるのは、いけないよ、輝代子ちゃん」

「だって、ブラジャーつけないで、パンツもはかないで、素肌に着物を着ると言われてこんな小さな衣裳もらったんですよ。私、どうしても嫌やッ」

「本当？」

「本当よ」

「僕が相手でも嫌やなの？」

輝代子は涙のふき出た眼を瞋^{みは}って潔を見た。思いがけない言葉が聞こえたのが信じられない様子だった。

27

七日間の伊豆のロケーションで、葵輝代子が見せたラブシーンの迫力は、たちまちの中に映画界の話題になり、週刊誌のグラビアには、**輝**^{みん}一本の三上潔と、肌も露わな輝代子の**躰**^{からだ}をぶつけあうようにして抱きあい、濡れたまま唇を重ねあっている写真が掲載された。どの週刊誌にも例外なくのり、期せずして映画の宣伝は大々的に行われた結果になった。誰もが驚いたのは、輝代子がこれまでの映画では見せたことのない大胆な姿態を惜しみなく披露^{ひれき}したのと、あの日本風の顔からは想像外だった新鮮な肉体美と、にもかかわらず清潔感のあふれた画面になっていることであつた。

「ふーむ、ふーむ、ふーむ。これは、お手柄やったなあ」